

新聞と雜誌

△△△△△△△△△△△△△△△△
●日本の家庭と米國の家庭と

日本では家を本位とし、米國では個人を本位としてをりますから、米國では子供の無い場合に家の斷絶することなどには少しも頓着しない、結婚も米國では無論本人の意思通りにさせるが親との同意見で定めるのが普通、親の賛成しない結婚をした場合には財産を少しも與へぬと云ふ制裁が設けられてあります、日本では細君や子供が過つて器物を毀しても直ぐに怒鳴りつける夫が澤山あるが、米國の中以上の家庭ではこの叱る怒ると云ふことをせぬ、彼の有名なブライアン氏の令息が一日父の書齋の高價なる窓を過つて毀しましたが氏も夫人も此事に就ては一言も云はなかつた處が翌日令息は學校から歸るや昨日の過を謝し、毎日家庭に於て多少の動きを爲して賠償することを申出て、ブライアン氏は非常に喜んで其請を許したと云ふ、斯の如く叱らず怒らず反省を促すのが彼の國

の家庭に於る教育の方針である。

(日本婦人八十號安部磯雄氏)

●報知新聞 女子の教育と題して論じて曰

く家庭に於ても社會に於ても男女は其の天性に従ひて分業し協力すべくして同一の事務の上に競争せんとすべからず故に高等女學校の教育に至りては中學の教育と大に其趣を異にせざる可からず妙齡の女子をして精神を過勞せしむるは母性機能の發育に害あることは學理と經驗との明證する處なれば女子の教育は高等女學校にて完結するを可とせん女子は兒童を善化し美化するに適すべき家庭を主宰せむために穩健にして調和ある教育を受けざる可からず而し多少の例外あり家に富あり才に餘りある者が社會の表面に奔走し交際場裡に翱翔するも何等の妨げなかるべく殊に賢母良妻なるの修業をつみ其本務を果して餘力を以て男子の業務を助くは立派なる事なり

●男女學生交際論 一體人は社交的動物であるから、學生と雖も亦この社交といふことを要求するのは當然である、而して社交にて同性間の交際があると同時に異性間

の交際もあるから、この社交慾のために男女學生が相互に交際せんと欲することのあるは事實として認めなければならぬ、併し事實であるから必ず是れを獎勵すべしと云ふ譯ではないが、先づ其の道德的價値を能く考へてからならば決して悪いことではないと思ふ、今日の如く利害得失如何を學生そのものが他に向つて問ひ、又た道徳家先生に尤めらるゝが恐ろしいやうな交際をせぬがよい、要するにして善いか悪いか分らぬやうなことは後廻はしにして絶對的によいことをするのが宜しいと思ふ、學問を勉め、徳育に志し、運動を勵むが如き必然してよいことが澤山にあるのである(中央公論六月號、建部文學博士)

●交際科を設けよ 今日的高等女學校程度にては、年齢體格こそ既に結婚の資格もあり、且つ我國の習慣として女子十七八歳になれば、早く結婚を急ぐの風があつて、卒業後直ちに結婚するもあれど、末だ學問、人格に於て、男子と均衡せざる恨あるのみならず社交の智識に至つては全くゼロである、之れを補給するものは家庭の母の責任なりと云ふ人があるが、今日の家庭の

母では固より左様の教育は頼むべくもあらず、到底之れも學校教育に待たざるを得ない、故に懸念當面の處置として、先づ四方の女學校に、この交際の一科を設け、新時代の進歩を助け、新家庭の悲惨を救ふことが必要である(家庭雜誌六月號、中尾清太郎氏)

●日本婦人論 現今日本に於ける中流以上の家庭には有名無實の主婦が多いのである、最も社會の組織やら家の格式と云ふやうなことが自然婦人を無能にするのであるか、是れは甚だ面白からぬ現象であると思ふ、元來其の職にあるものが其の任を盡し得ぬとすれば、それは即ち飾物である、何んか公共團體等の事業には時に飾り物の必要があるであらうが、最も活動を要する家庭に於て、若し主婦が無能で飾物である時は、其の家族は決して趣味ある生活をなすことが出来ぬのである、従つて是れより生ずる弊害が社會を亂す原因となつた實例が甚多いのである、故に主婦となりたる以上は、是非是れに相當する實力を養はねばならぬこと、思ふのである。

▲活た頭の婦人 要するに自分は日本婦人

が今少し活きた頭を有つやうにならんとを望むのである、自ら爲さんと決心さへすれば自然勇氣も能力も出るものである故に例令は中流以上——華族社會に於ても、主婦としては家事萬端を自分で支配し、子女の教育も充分自分で出来る、乃ち活眼を有する婦人の出て來らんことを祈るものである。

▲己を研究せよ 是れと同時にまた中流以上の婦人は社交の花であるから、交際術に於ても巧みであればならぬ、然るに日本にての園遊會や、宴會等に行つて見ると、婦人は、婦人同志、男子は男子同志相集つて少しも話しの調和がとれぬ爲め甚だ寂寞である、斯んな調子故自然賤業婦を席に上すやうになるのである、兎に角今は婦人の過渡時代であつて、日本婦人は徒らに西洋風を真似てもならず、また固有の昔風のみでも居られぬと云ふ場合であるから、婦人自ら婦人問題を研究し、活眼を開いて自己の立場を定むることか第一であると思ふ。

●通學と寄宿 各々一長一短はあります

(愛國婦人伯爵柳澤氏)

か、先づ家庭より通學する方の利益を云へば第一愛家思想を養ふことが出来、常に家に居るに依つて家族の必要を悟り家庭の趣味を感じ、家族相互の義務を知り、親子兄弟間の愛情を濃かならしめ、家政經營を目睹することが出来後日妻として母として家政を整理する場合に少なからぬ利益を感ずるに違ひありません、寄宿の方の利益は、専心學問に従事することを得、起床から就眠、三食、入浴、運動等總て秩序の良習慣を養ふの利益がありますが、是れは家庭に於ても規律の正しい家では出来ることでありますから、何方が利益が多いかと云へば、家を愛する觀念も養ひ、家事も覺へ、勉強も出来る通學の方が利益が多いと思ひます、故に寄宿舎に居るものでも、夏季休暇などには家庭に歸へると云ふことが必要であります(ムラサキ六月號、後閑菊野氏)

